

## 意義と意味の哲学

「明けの明星」と「宵の明星」。これらは「同じ」なのか。ゴットロープ・フレーゲは言う。それらの「意味」(Bedeutung)は同じであると。しかし、それは意味が同じというだけである。彼は明確に、それらの「意義」(Sinn)は違うという。つまり、それらの表現には、「同じ」であるものがあり、「違う」ものがあるのである。答えは次のようになるだろう。われわれが、フレーゲが言う意味での「意味」に関心があるとする。それは、ある諸物が、見え方、与えられ方は違っても、「同じ」ものを指しているとする。すると、それらの表現は「同じ」だろう。一方、「意味」ではなく「意義」に関心があるとする。すると、それらの表現は「同じ」ではない。それらは、対象の与えられ方において異なっているからである。

言語表現が与えられたとき、その何に関心を持つか。上の二つの違いは、この関心のあり方によって生じたと言える。われわれは世界の諸物に接するために、様々な資源を持つ。例えば、言語や観念である。それらは大抵、一つの公共的な世界へ接するためのものである。すなわち、それらは外界の事物を指す。われわれは、自分だけではない、公共的世界を大事だと思う。だから、言語表現は、その世界に適合すべくつづれる。「明けの明星」と「宵の明星」はこの場合同じものだと言われる。それは、言語、観念の多様さに反して、世界にある一つの同じものを指しているからである。しかし、公共的世界ではなく、内的世界へ関心を向けたらどうか。その場合、それらは違うものとなる。心の中では、そう見えたから、違ったふうに現れるからである。

フレーゲ哲学において、「意義」と「意味」はもう十分すぎるほど論じられているように思える。しかし、上でわれわれが強調する「関心」という観点から、それを解釈しようとする試みはほとんどないと言ってよいだろう。本論は、フレーゲの「意義」と「意味」に、この「関心」という要素を付け加え、そしてそれを可能な限り形式化する。われわれの主張は、それが存在論、いや、メタ存在論になる、というものである。それは、「存在するとはどういうことか」に対する、一つの答えを与えている。結論から言えば、われわれの主張は、「関心」が「意味」を定める、つまり、何が「同じであるか」を定める、というものである。そして、この「関心」を変数と思えば、「何が存在するか」に対する、様々な立場の形式を表現できる、とわれわれは考える。われわれがそれを「メタ存在論」となる、と主張する所以である。

### 1 フレーゲにおける「意義」と「意味」と「関心」

そのため、われわれはフレーゲに即して、彼が「意義」と「意味」を論じるときに、いかに「関心」という要素を重要視していたかを確認する。われわれは、フレーゲから離れて独自の解釈を行うのではない。フレーゲは、それらを論じるとき、明確に「関心」を念頭に置いていたのである。

### 1. 1 フレーゲにおける「意義」と「意味」

まず、フレーゲにおける「意義」と「意味」について、論文「意義と意味について」(Über Sinn und Bedeutung)を参考にごく手短かに説明しよう。a, b, c を三角形の頂点とその対辺の中点を結ぶ線分であるとする。すると、それらは互いに交わり、それらの交点の名前が形成される。そしてそれらは全て同じ点である。よって「a と b の交点と b と c の交点は等しい。」この文が正しくなる。さて、このときフレーゲは二つの問いを提出する。まず、この文で「等しい」ものは何なのか。彼は言う。「a と b の交点」が「意味」するものと「b と c の交点」が「意味」するものである、と。その記号は、何かの対象を表示する(bedeutен)。この、記号によって表示された対象が「意味」なのである。そしてもう一つの問い。それは、この文はどのようにして認識価値をもたらすか、である。もし、表示された対象だけが問題であるならば、「a と b の交点と b と c の交点は等しい」という文と「a と b の交点と a と b の交点は等しい」という文は同じものになってしまう。しかし、前者と後者の問いは違う。後者は認識を拡張しないのに対し、前者は確かな認識の拡張を与えていると考えられるのである。では、どのようにしてか。フレーゲは、「a と b の交点」と「b と c の交点」の交点は、その表示されている対象こそ同じであるが、その対象の与えられ方が異なっているという。そして彼は、異なる与え方によって与えられた対象が、実は同一であった、というのは、一つの確かな認識の拡張だと主張する。前者の主張は、このことを表現しているのである。このとき、「a と b の交点」という記号表現が与える、この対象の与え方、これを彼は「意義」と述べるのである。

上の説明で、われわれは「意義」と「意味」に対するおよその理解は形成できるだろう。しかし、フレーゲは上のことを言語表現全てに対し一般化する。上の説明では、記号表現が、複合的であり、かつ対象を与えるときのみだけ有効であるように思える。例えば、「現在のアメリカ大統領」は確かに「意義」と「意味」を持つと考えられるが、「ジョン」のような固有名は「意義」を欠くように見える。また「1+1は2である」のような文は、そもそもそれが表示する対象があるかどうか分からない。しかし、フレーゲは、「ジョン」も意義をもち、また「1+1は2である」のような文も全て意義、及び意味を持つというのである。

われわれはこの主張の細かな解明は行わず、これを議論を進める前提として受け入れる。一つだけ、この先の議論において必要な注意を与えておこう。彼は、「1+1は2」のような文の「意味」は「真理値」であり、この場合「真」であるとする。そして「意義」はこの「真理値」がどのように与えられたか、であるとする。彼は、特に真理値が「意味」となる記号結合の「意義」を、特に「思想」と述べている。

### 1. 2 フレーゲにおける「関心」

では、フレーゲのこの「意義」と「意味」論における「関心」とは何なのか。ここで、「関

心」という概念を、われわれは特別な意味で用いようとは思わない。それは、素朴に「何を重要だと思うか」を表すもの、と考えてよいだろう。

われわれはまず、フレーゲ自身が用いている例として、「オデュッセウスは深く眠ったまま、イタカの砂浜に置かれた」を考えよう。彼は、この文に関して二つの関わりが可能であるという。一つは、まず文の「意義」で満足する、という関わりである。それは彼によると、その文がもたらす効果のみを問題とする、というものである。それは、詩作や文学作品に対する関わり、と言ってよいであろう。対して、彼はもう一つの関わりがあるという。それは、「意義」だけではなく、「意味」を問題とする、というものである。彼は、思想に「意味」があるか、すなわち、それが正しいかどうかの問題となることがあるという。そうすると、先の文の関わり方が、一つ目のものと比べて変わってくる。正しいかどうか、が問題であるということは、少なくともその前提条件として、そこで用いられている名前が何らかの対象を指しているかどうか、が問題となる。そしてそれは、名前が「意味」をもつかどうか、ということである。つまり、彼は正しいかどうかに関心を持つとき、文そのもの、そして、その部分が「意味」を持つかどうかの問題となる、というのである<sup>1</sup>。

フレーゲは明確に、正しさへの関心と語の「意味」を結びつけているのである。正しさにこだわるからこそ、語の、語表現の対象にこだわる、そう言っている。そして、フレーゲにおける「正しさ」とは、われわれの心のありようとは関係のない、客観的なものとして正しさのことである。文の部分である語表現が「意味」を持つとき、それは対象を表示する、とされるが、このことを考えると、それはまさに客観的な対象のことである。それは、主観を離れた、公共的なものである。よって「明けの明星」と「宵の明星」の「意味」は「同じ」とされる。正しさにこだわる、真理への関心があるからこそ、それは「金星」という客観的、公共的対象を表示するのである。

このことを、もう少し敷衍しよう。フレーゲは「意義と意味について」において、語、表現、文全体を区別する三つの段階があると主張する。それは「表象に関わる区別」、「意義には関わるが意味には関わらない区別」、そして「意義にも意味にも関わる区別」である<sup>2</sup>。まず、区別というのは一般的に、必要に応じて設けられるものであり、つまりは何かの関心に対して相対的に定まるものである。それを踏まえた上で、これらの段階は何に対応しているのか。それを明らかにするため、われわれはまず、そのうち、二番目のものを考えよう。彼は、この二番目のものは、詩作や雄弁術に関する関心が設ける区別であるといい、主にそれは「色合い」や「陰影」によって形成されるという。ここで、詩作や雄弁術とは何なのか。彼はまず、それが与える効果は客観的なものではないという。それは、われわれの心のありようや素質に関係するのであり、そのようなものに相対的に定まるものである。しかし、彼はそれが半ば公共物でもあることも認める。「人間の表象作用が親和的でない限り」それは、アートとして伝わらないだろうし、またそれが与える効果も、共有されないだろう。よってそれらは、半ば主観的、半ば客観的なものである。他方、われわ

れは「意義と意味にも関わる区別」は客観的なものであることを示した。「意義」のみならず「意味」に、特に思想の真理値こだわるとき、それは正しさへの関心、客観性、公共性への関心となるからである。では「表象に関わる区別」とは何なのか。それは、完全に内的なものである。それは全く公共的なものを含まず、各人各様の区別があるものである。そう考えると、最初の三つの区別は明確であろう。それらは、公共的なものへの関心に応じて配列されているのである。公共的なものに全く関心がなければ、表象の、すなわち各人各様の区別が「ある」。続いて、詩作、雄弁術は、完全に客観的とはいえないまでも、人の感受性、心のありように関しての一般性が前提とされ、それに応じて区別が「ある」。対して、事実に興味があるならば、各人の心のありようを完全に排された、世界に関する区別が「ある」。そのとき、心において、あるいは言語表現において細分化される区別は、対象という点において同一視されるのである。

以上、われわれは「意義」と「意味」と「関心」の関係の議論を終える。われわれが確認したかったのは、フレーゲは正しさに「関心」を持つからこそ、「意味」にこだわる、ということである。そしてその「関心」を持つとき、様々な表象、あるいは言語表現の「意味」は、一つの対象を表示すべく一つにつぶれるのである。

## 2 「意義」と「意味」の一般化

われわれはフレーゲの「意義」と「意味」に「関心」を付け加えて解釈を行ってきた。われわれが次に行いたいのは、それをできるだけ一般化することである。われわれは、以上で行った議論の形式を取り出したい。そのとき、様々なものが「変項」となるが、それで示される形式が、冒頭の主張通り「メタ存在論」となることを示したいのである。

まず、われわれは「関心」に今まで注目してきた。そして、フレーゲの「関心」は「正しさ」であることを確認した。まず、われわれはこれを形式化しよう。「関心」は多様でありうる。よって、それが必ずしも「正しさ」への関心である必要はない。それは、何かへの関心、としよう。

しかし、そうすると言語表現の「意味」はどうなるのか。フレーゲによれば、「正しさ」への関心を持つからこそ、われわれは「意味」にこだわるのだった。「正しさ」でないものも可能、としたら、「意味」はなくなってしまうのではないか。しかし、まさにここでわれわれは思い切って主張したいのである。フレーゲにおける「意味」は、「正しさ」への関心によって定まったものである、と。つまり、「意味」は「関心」によって定まる、「関心」が変われば「意味」も変わる、こう言いたいのである。こう言い換えられるかもしれない。この枠組みにおける「関心」とは、まさに、言語表現からある対象への関数に他ならない、と。「意味」とは、言語表現に、その「関心」によって、一つの対象を対応させるもの、そういうことができるのである。

そして、さらに形式化したいものがある。通常、典型的に「意味」が問われるものは言語表現である。しかし、それは「表象」であってもよいだろう。様々な表象の、例えば視

覚表象の「意味」は同一でありうる。同じ人物が、異なる装いをすることがあるからである。よって、われわれは、それを言語でなくてもよいとする。それは「表象」であってもよい。一般的に言って、それは「集合」でよいだろう。言語の集合、表象の集合、その他の集合を許してよい。さらに、それらの「意味」と言われる「対象」の集合も、任意なものを考えてよいとしたい。それは、定義域の部分であってもよいし、それとまったく別であってもよいのである。

そうすると、形式的にはわれわれが言いたいのは次のことである。

$$\phi : X \rightarrow Y \quad \phi : \text{関心} \quad X : \text{一般化された言語表現} \quad Y : \text{一般化された対象}$$

つまりは、「関心」が、一般化された言語表現に「意味」を与える、ということである。

## 2. 1 この定式化の意味

さて、ではこのような形式化に何の意味があるのだろうか。形式化しすぎて、骨組みだけになってしまつては意味がないだろう。それには、実質が伴わなければならない。これに何の意味があるのか、それを以下、述べていく。

まず、先にフレーゲを論じるときに挙げた3つの区別、「表象に関わる区別」、「意義にかかわる区別」「意義にも意味にも関わる区別」を考えよう。これは、実は容易にわれわれが与えた形式で分類できる。われわれは、これらの区別を「公共的なもの」への「関心」の度合いによって分類したのであった。ならば、「関心」を関数として理解したわれわれに、上の形式を用いてそれらを説明するのは容易い。「表象に関わる区別」は、定義域Xが表象の集合で、値域Yも表象の集合である。そして、それらは全て、区別を保存する。すなわち、関数 $\phi$ は恒等関数と考えればよいのである。「意義にかかわる区別」とは、詩作や雄弁術に関する関心により生じる。それは、ある表現が、どのようにわれわれの精神に効果を生み出すか、ということへの関心であろう。そうすると、定義域Xは言語表現、値域Yは「精神への影響の仕方」、そして関心 $\phi$ は、各々の言語表現がどのように精神に影響を与えるか、となる。もちろんYが、そして $\phi$ が何なのか、ということは問題になりうる。しかし、それは美学上の問題である。われわれの関心は、分類することであるから、その問題は無視してよいであろう。「意義にも意味にも関わる区別」を、われわれは公共的なもの、客観的なものへの関心から生じるものとした。すると、定義域Xは言語表現、値域Yは、世界にある諸物を含む対象の集合（フレーゲによればそれは真理値も含む）、そして $\phi$ は、どの言語表現が何を表示するか、という、極めて常識的な関数（「明けの明星」と「宵の明星」を同一対象に帰せしめるような）となるのである。

さて、フレーゲが行った区別を行えるというのはいいとしよう。しかし、それだけではわれわれの定式化の意味は見えてこない。われわれは、それが「メタ存在論」になると述べたのである。このことを説明せねばならないだろう。

そのため、まずわれわれは「存在するとはどういうことか」を簡単に考えたいのである。われわれは、非常に常識的な捉え方をしたい。存在論という大仰なテーマを論じるのではなく、「そもそも「何かがある」ということは、どんな状況で意味をなすか」を考えたいのである。さて、それではそれはどんな状況か。それは、「その何かがない」ということが意味をなす状況である、とわれわれは主張する。例えば、「オアシスがある。」オアシスは、われわれが見た限りでは、あるかもしれない。しかし、「実際には」ないこともある。「そこに鉛筆がある。」それは、「実際には」鉛筆形のチョコかもしれないのである。

何を言いたいのか。われわれが主張したいのは次のことである。われわれは、存在に関して、「だまされうる資源」を持つ。それは、われわれの表象であったり、あるいは言語表現だったりするだろう。それは、本当の实在、あるいは意図した实在を指さないこともあるのである。それに対して、それとは独立の、本当にあるものがある。表象に対する、外界の事物、言語表現に対し、それが実際に指すもの。われわれの主張は、この二つのものがあってこそ、われわれは「ものがあるかどうか」を問うことができるということである。

そうすると、「存在論」とは何になるのか。先ほどの定式化で考えよう。一般化された言語表現、これは、「われわれに与えられているが、実際にあるかどうかを問わないもの」となる。われわれは「表象」を、幻と切って捨てることができる。「丸い四角」を否定することができる。対して、一般化された対象は「本当にある（とされている）もの」である。表象は、何かを表示する。言語表現は、何かを表示する。この「何か」こそが、本当にあるものなのである。

では、「関心」はどうなのか。われわれは、これこそが存在論を分類するものであると主張するのである。それは、一般化された言語表現の中の、何を同一視するかを定める。われわれは三つの典型的な場合を考えることができる。定義域として、われわれの表象を考えよう。一つの関心。「われわれの表象は、全て幻であり、存在するのは一である。」この場合、Yの要素は一つとなり、表象は全てこの対象を表示することとなる。これはパルメニデス、スピノザをはじめとする、典型的な「一者」の思想である。次の関心。「表象は全て实在である。」この場合、Yは表象の集合となり、関心は恒等関数となる。それは極端な観念論であると言えるだろう。最後に、「表象は世界にある諸物を指す。」この場合、Yは「世界にある（常識的な）諸物」となる。表象はそれより豊かであり、関数 $\phi$ によって、違う表象は、場合によって同じものを表示するだろう。これは常識的な世界観と言える。

## 結語

われわれが与えた例は、ごく一部である。われわれはこの枠組みを用いて、様々な存在論を分類できると考える。例えば、「命題とは何か」という問い。これは例えば、初期ラッセル、フレーゲ、ヴィトゲンシュタインによって答えが違っている。「言語表現」を定義域Xとして、では「本当の」命題とは何なのか。初期ラッセルは、限りなく言語表現の違いが命題の違いを反映していると考え、フレーゲは「思想」が同じかどうかで同一視する

だろう。対してヴィトゲンシュタインは、それは「真理関数」としての性質によって同一視されると主張する。一般的に「～～とは何か」という問いは、全てわれわれの形式で有意義に問えるだろう。すなわちそれは、一般化された「言語表現」という資源の中から、何を同一視するか、という問いへと変わるのである。

---

注

<sup>1</sup> Gottlob Frege, 'Sinn und Bedeutung', in Ignacio Angelelli(ed), *Kleine Schriften*, New York, Georg Olms Verlag, 1990, pp. 148-149.

<sup>2</sup> Frege, 'Sinn und Bedeutung', p. 147.